

令和元年度（2019年度）
研究紀要
第33号

「知的障がい特別支援学校における
カリキュラム・マネジメントの推進に関する実践研究
～校内研修シートを活用した実践事例を考察して～」

北海道立特別支援教育センター
Hokkaido Special Needs Education Center

ま え が き

平成29年4月に新学習指導要領が告示され、令和2年4月から小学校及び特別支援学校小学部で、令和3年4月から中学校及び特別支援学校中学部で完全実施となります。また、高等学校及び特別支援学校高等部では、令和4年4月から学年進行で実施となることから、道内の特別支援学校においても、新学習指導要領の趣旨を踏まえた教育課程の編成をどのように行うとよいか課題とする学校が多くあり、各学校の研究に位置付けたり、教育課程検討委員会等で検討されたりしています。

今回の学習指導要領改訂においては、総則の構成から、求められる教育の在り方や方向性を強く意識することができます。「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」という方向性をもとに、「子供一人一人の発達をどのように支援するか」、「何が身に付いたか」、「実施するために何が必要か」という6つのプロセスについて教育課程を通して明確にする必要があります。

近年、特別支援学校の授業づくりが一人一人の教育的ニーズに基づき、心理検査等を活用したり、個別の指導計画に目標や手立てを明記したりするなど、的確な実態把握が積極的に行われた上で実施されてきていることは大変素晴らしいことですが、授業の設計図とも言える学習指導案には、前述したプロセスの一つ一つが不明確であったり、相互の関係性の整理が十分でなかったりするものも少なくありません。これらのプロセスを集約したものが学習指導案であり、その方向性を明確にすることで授業の質的な向上を図ることができると考えます。

新学習指導要領においては、カリキュラム・マネジメントの充実により、児童生徒一人一人に対して育成を目指す資質・能力を確実に育むことが必要であるとされています。

そのためには、各学校において、現在行っている授業の評価・改善を図るために必要な見方や考え方の理解を深め、教育活動の質的な向上を図る教育課程の改善・充実の方策を学校全体で検討するなど、現在行っている教育活動を評価・検証することが必要です。

また、本研究の背景としては、「どのような取組を行うとよいのか」、「どのように新学習指導要領の考え方を踏まえた授業づくりをするとよいのか」、そして「授業改善をどのように教育課程への改善・充実につなげるのか」など、知的障がい特別支援学校全体で検討するための具体的な方策を求める意見が多くあります。

そこで、本研究においては、「校内研修シート」及び研究に対する共通理解を図るための「連携シート」、研究推進のイメージを共有するための「デザインシート」、課題解決や効率的な研究推進のための「マネジメントシート」を作成し、これらを活用した研究推進の仕組づくりを行いました。

知的障がい特別支援学校においては、本研究で整理した研究の仕組を各学校の実態に応じて活用し、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進や、学部間や学年間、教科間のつながりを意識した教科指導の充実を目指した「カリキュラム・マネジメント」の充実を期待しております。

また、特に本校内研修シートの活用については、4つの研究協力校の実践事例をまとめることにより、新学習指導要領の趣旨を踏まえた教育活動の質的な向上を図るための具体的な方法の確立に資する取組であると考えておりますので、本研究の成果を各学校の実践や研究・研修に御活用いただき、その成果などについて忌憚なき御意見をいただければ幸いに存じます。

最後に、本研究の推進に当たり御協力いただきました、研究協力校及び関係者の皆様に厚く御礼を申し上げ、発行に当たっての御挨拶といたします。

令和2年3月

北海道立特別支援教育センター所長 小 原 直 哉

「知的障がい教育特別支援学校の緊要な課題の解決を図るための実践研究」

「知的障がい特別支援学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進に関する実践研究」

～校内研修シートを活用した実践事例を考察して～

三浦 貴徳 松原 ひかり 目小田 泰昭

本研究の概要	1
I 研究の背景	
1 国の動向	2
(1) 学習指導要領において関連する内容の整理	
(2) 知的障がい教育の授業づくりにおける現状と課題の整理	
2 本道の知的障がい特別支援学校における課題意識	4
(1) 新学習指導要領への移行に向けた取組	
(2) 各障がいの特性に応じた授業づくりの工夫	
II 「校内研修シート」の作成と活用	
1 「校内研修シート」の作成	5
(1) 作成の必要性	
(2) 作成の考え方	
(3) 活用について	
(4) 活用に係る取組について	
III 研究協力校における取組	
1 研究協力校における研究推進の取組	8
(1) 研究に対する共通理解を図るための「連携シート」の活用	
(2) 研究推進のイメージを共有するための「デザインシート」の活用	
(3) 効率的な研究推進のための「マネジメントシート」の活用	
2 研究協力校における「校内研修シート」活用事例	
事例1 目指す生徒の姿から、授業づくりを考えた取組事例（北海道雨竜高等養護学校）	9
事例2 各教科の目標や内容等から年間指導計画を考えた取組事例 （北海道札幌あいの里高等支援学校）	13
事例3 複数の研修シートを活用した授業改善の取組事例（北海道札幌伏見支援学校）	17
事例4 指導すべき課題を明確化した取組事例（北海道余市養護学校）	22
IV 研究の成果	26
V 今後の課題	27

研究協力校・研究協力者

引用文献

参考文献

本研究の概要

1 研究の概要

知的障がい特別支援学校においては、学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえ、学校として育成を目指す資質・能力を明確にするとともに、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善や、学部間、学年間、教科間のつながりを意識した教科指導の充実等が求められている。

これらの実現のためには、学校全体として児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育課程の実施状況に基づく改善を通して、教育活動の質を向上させることができるようカリキュラム・マネジメントを推進し、指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行う必要がある。

これらのことから、知的障がい特別支援学校における緊要な課題の解決を図ることができるよう、指導資料の作成・活用や各学校が実際に行った教育活動を通して、知的障がい特別支援学校へカリキュラム・マネジメントの具体的な実践の普及・活用を促進するための方策等を研究する。

2 研究の目的

本研究において、「校内研修シート」を作成し、活用事例を道内の知的障がい特別支援学校へ普及することにより、各学校が組織的・計画的に教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントを推進することに資する。

3 研究の方法及び内容

- ・新学習指導要領の趣旨を踏まえた「校内研修シート」の作成
- ・研究協力校による「校内研修シート」を活用した具体的な取組や実践事例の紹介

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・各研究協力校においては、「校内研修シート」を活用することにより、新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくりの考え方等を整理するとともに、各学校の実態に応じたカリキュラム・マネジメントを推進するための基盤を作ることができた。
- ・研究の推進に当たっては、研究に対する共通理解を図るための「連携シート」、研究推進のイメージを共有するための「デザインシート」、各段階の課題解決や効率的な研究推進のための「マネジメントシート」を活用することにより、研究協力校と連携した研究を効果的に進めることができた。

(2) 今後の課題

- ・「校内研修シート」の活用にあたっては、記入する内容に戸惑う様子が見られたことから、記入する際に参考となる記入例を示すことが必要である。
- ・各学校の授業研究等において「校内研修シート」を活用することにより、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために必要な見方や考え方を、学びのプロセスとして紹介する必要がある。
- ・授業等の教育活動の質的な向上を図るため、本研究で得られた知見を基に、各学校による具体的な取組の推進が必要である。

I 研究の背景

1 国の動向

(1) 学習指導要領において関連する内容の整理

今回の学習指導要領の改訂においては、これまでも学校教育に求められてきた「生きる力」の育成を継承しながらも、これからの予測困難な時代を自ら切り拓いていくことのできる子供たちを育成することが求められる役割の1つであることが示された。

また、平成29年4月に告示された特別支援学校小学部・中学部学習指導要領及び平成31年3月に告示された特別支援学校高等部学習指導要領（以下、特別支援学校学習指導要領）においては、小学校学習指導要領並びに中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領に準じて改訂されたことを踏まえるとともに、基本的な考え方が各学校種において貫かれているなど、これまで以上に学校間の連続性を踏まえた取組が必要である。

さらに、平成30年3月発行の「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編（幼稚部・小学部・中学部）」の改訂の基本方針の「1の①」において、次の3点が示されている。

① 今回の改訂の基本的な考え方

ア 教育基本法、学校教育法などを踏まえ、これまでの我が国の学校教育の実践や蓄積を生かし、子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することを目指す。その際、子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視すること。

イ 知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視する平成20年改訂の学習指導要領等の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質を更に高め、確かな学力を育成すること。

ウ 先行する特別教科化など道德教育の充実や体験活動の重視、体育・健康に関する指導の充実により、豊かな心や健やかな体を育成すること。

「ア」に示されている「社会に開かれた教育課程」については、これからの時代に求められる教育を実現していくため、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようになるのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくことになる。

また、「イ」では、「生きる力」をより具体化し、育成を目指す資質・能力を明確にすることが示されている。

さらに、「1の③」においては、「主体的・対話的で深い学び」について、次の6点に留意して取り組むことの重要性が示されている。

③ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進 （前略）

ア 児童生徒に求められる資質・能力を育成することを目指した授業改善の取組は、既に小・中学校や特別支援学校を中心に多くの実践が積み重ねられており、特に義務教育段階はこれまで地道に取り組まれ蓄積されてきた実践を否定し、全く異なる指導方法を導入しなければならないと捉える必要はないこと。

イ 授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、児童生徒に目指す資質・能力を育むために「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で、授業改善を進めるものであること。

ウ 各教科等において通常行われている学習活動（言語活動、観察・実験、問題解決的な学習など）の質を向上させることを主眼とするものであること。

- エ 1回1回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること。
- オ 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること。
- カ 基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題がある場合には、その確実な習得を図ることを重視すること。

これらの内容は、本研究の中核である「児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」に係る記載であり、本研究との関わりにおいては、「各教科等の学習過程の重視」として捉えている。

(2) 知的障がい教育の授業づくりにおける現状と課題の整理

ア 中央教育審議会の特別支援教育部会における審議の取りまとめとの関連

平成28年8月26日に報告された「特別支援教育部会における審議の取りまとめ」（中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会）では、「3. 特別支援学校 (3) 知的障害者である子供たちに対する教育課程 ①現状と課題」において、次のように記載されている。

- 知的障害のある子供たちの学習上の特性として、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすいことや成功経験が少ないこと等により、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないことがあり、知識や技能が定着し、実際の生活の場で生かされるようになるまでには、時間をかけた計画的な指導が特に重要である。
 - このため、知的障害のある子供たちを教育する場合の各教科等は、学校教育法施行規則において、小・中学校、高等学校とは別に規定され、また、特別支援学校学習指導要領においても、知的障害の特徴及び学習上の特性等を踏まえ、子供たちが自立し社会参加するために必要な知識や技能、態度等を身に付けることを重視し、各教科等の目標と内容等が他の障害種とは別に規定されている。
 - また、特別支援学校高等部には、小学部から特別支援学校で学んできた子供たちに加えて、小・中学校の特別支援学級等で学び、中学校卒業後、特別支援学校高等部に入学した子供たちが在籍しており、障害の程度や学習状況等の実態に幅があることから、特別支援学校学習指導要領は、一人一人の子供たちの障害の状態等や教育的ニーズに応じた教育課程を各学校が編成できるよう、知的障害のある子供たちのための各教科について、各段階に共通した目標及び段階別の内容を示している。
- (中略)
- 一方で、知的障害のある子供たちのための各教科の目標・内容が大綱的に示されているため、各教科等を合わせて授業を行う場合、各教科等の目標・内容を関連付けた指導及び学習評価の在り方が曖昧になりやすく、学習指導の改善に十分に生かしくいという指摘がある。
 - 各教科等を合わせて指導を行う場合に、各教科等の目標に照らした観点別の学習評価規準を設定して評価する先行的な取組も行われている一方で、必ずしも各教科等の目標が十分に意識されずに指導や評価が行われている場合があることも指摘されている。

知的障がい特別支援学校の各教科の目標や内容は、小・中学校の各教科と異なり、学年ごとに決められたものではなく、段階別に示されている。これは、発達期における知的機能の障がい、同一学年であっても、個人差が大きく、学力や学習状況も異なるため、段階を設けて示

すことにより、個々の児童生徒の実態等に即し、各教科の内容を精選して、効果的な指導ができるようにしているためである。

各教科の目標や内容が段階別になっているということは、一人一人の児童生徒の実態に合わせて、指導内容を個別に選択・組織しなければならないとともに、異なる学びの履歴や実態把握を十分にいき、一人一人の児童生徒の興味や関心、生活年齢、学習状況や経験等を十分に考慮して指導計画を作成することが大切である。しかしながら、現状としては、一人一人に合った指導計画を作成するというところに難しさを感じている指導者も多いと考える。

また、知的障がい特別支援学校においては、児童生徒の学習上の特性等から特に必要があるときには、学校での生活を基盤として、学習や生活の流れに即して学ぶことが効果的であるとの考えのもと、日常生活の指導、遊びの指導、生活単元学習、作業学習などの各教科等を合わせた指導が行われている。この各教科等を合わせた指導は、単元や題材という学習や生活の流れに沿って、効果的な学習を展開することをねらうものであるが、各教科等を合わせて指導を行う場合であっても、どの教科のどの内容を取り扱っているかを明確にする必要がある。

このように、取り扱う教科等が明確になっていないことにより、各教科等の目標が達成できているかの評価が十分に把握できないということが知的障がい特別支援学校の課題であると考ええる。

2 本道の知的障がい特別支援学校における課題意識

新学習指導要領への移行に向けて、道内の特別支援学校では、新学習指導要領の趣旨を踏まえた内容を研究主題とすることや、教育課程検討委員会等において教育課程の編成について検討するなどの取組が進められている。

以下の内容は、北海道特別支援学校副校長・教頭研究協議会における参加資料から、本研究に関連する課題意識について整理したものである。参加資料は、全8項目で構成されており、その中の「①新しい学習指導要領への移行に向けた取組、②各障がいの特性に応じた授業づくりの工夫」の2項目について着目した。これらの項目については、各学校の現状と課題を自由記述により回答したものであることから、各学校が潜在的に有する課題意識を把握する資料として有効であると考えた。

(1) 新学習指導要領への移行に向けた取組

本項目では、新学習指導要領の趣旨を踏まえた教育課程の編成に関する検討や、移行に向けた教職員に対する研修、さらに学校教育目標や育成を目指す児童生徒像の見直し等の記載が多く見られるなど、知的障がい特別支援学校の7割が新学習指導要領に係る取組を進めていることが分かった。各学校の取組の主な内容としては、教職員に対する研修、年間指導計画や指導内容表の改善など、教育課程の編成・実施に係る内容が多い状況である。

各学校の新学習指導要領への移行に向けては、学校教育目標や目指す児童生徒像の実現のため、「育成を目指す資質・能力を明確にする」とともに、それらを社会と共有する「社会に開かれた教育課程の実現」を目指すことが必要であるが、それらについて具体的な取組を進めている学校は、2割程度に留まっていることが分かった。

(2) 各障がいの特性に応じた授業づくりの工夫

本項目は、効果的な授業の実施に向けての課題や取組状況等について問うものであり、各学校の取組としては、授業改善に関する記述が5割、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に関する記述が4割の状況であり、授業改善に関する記述が9割近くとなっていることが分かった。

新学習指導要領の趣旨を踏まえると、各学校における授業改善及び授業づくりは、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の進め方だけでなく、授業評価や学習評価に基づいた授業分析による改善が行われていなければならないと考える。しかしながら、学習評価についての記述は1割程度となっており、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の進め方に着目した授業づくりを中心に考えている学校が多いことが分かった。

Ⅱ 「校内研修シート」の作成と活用

1 「校内研修シート」の作成

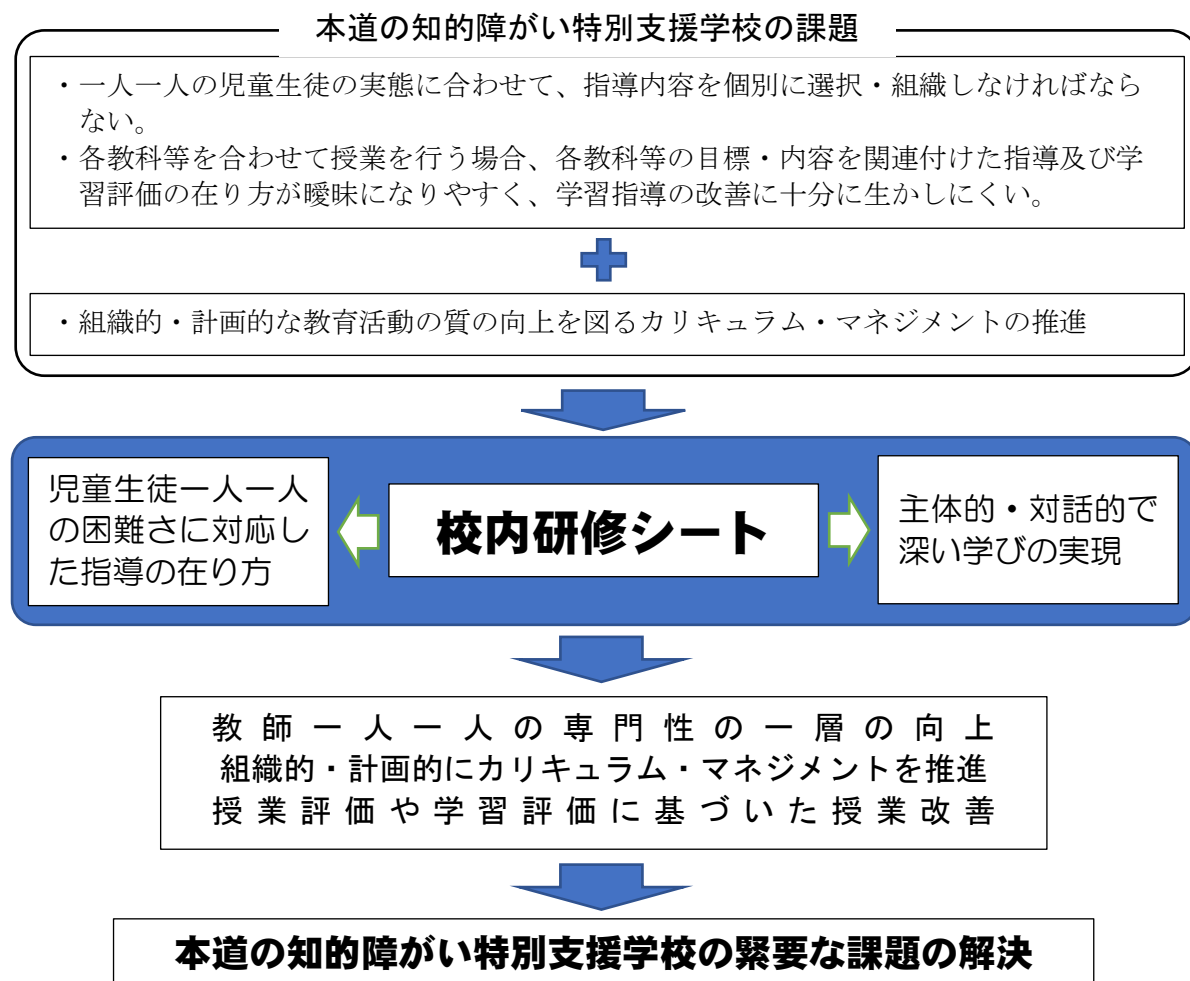
(1) 作成の必要性

本道の知的障がい特別支援学校においては、前述の「Ⅰの1の(2) 知的障がい教育の授業づくりにおける現状と課題の整理」でも述べたとおり、知的障がいのある子供たちのための各教科の目標・内容が段階を設けて大綱的に示されていることから、一人一人の児童生徒の実態に合わせて、指導内容を個別に選択・組織しなければならないことや、各教科等を合わせて授業を行う場合、各教科等の目標・内容を関連付けた指導及び学習評価の在り方が曖昧になりやすく、学習指導の改善に十分に生かしにくいといった状況にある。

このことは、新学習指導要領への移行に向け、各学校における緊要な課題として捉えることができる。一方、各学校においては、組織的・計画的な教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントの促進に対する課題意識も高い状況にある。

これらを踏まえ、本研究では、道内の知的障がい特別支援学校が新学習指導要領の趣旨を理解することはもとより、児童生徒一人一人の困難さに対応した指導の在り方や、主体的・対話的で深い学びの実現を図るための方策を検討し、教師一人一人がより一層専門性の向上を図る必要があると考えた（図1参照）。この方策の中核となるのが、「校内研修シート」である。

この「校内研修シート」の活用に係る取組は、各学校が組織的・計画的にカリキュラム・マネジメントを推進することや、日々の授業づくりに役立てることができ、全道の知的障がい特別支援学校の緊要な課題解決につながるものと考えている。



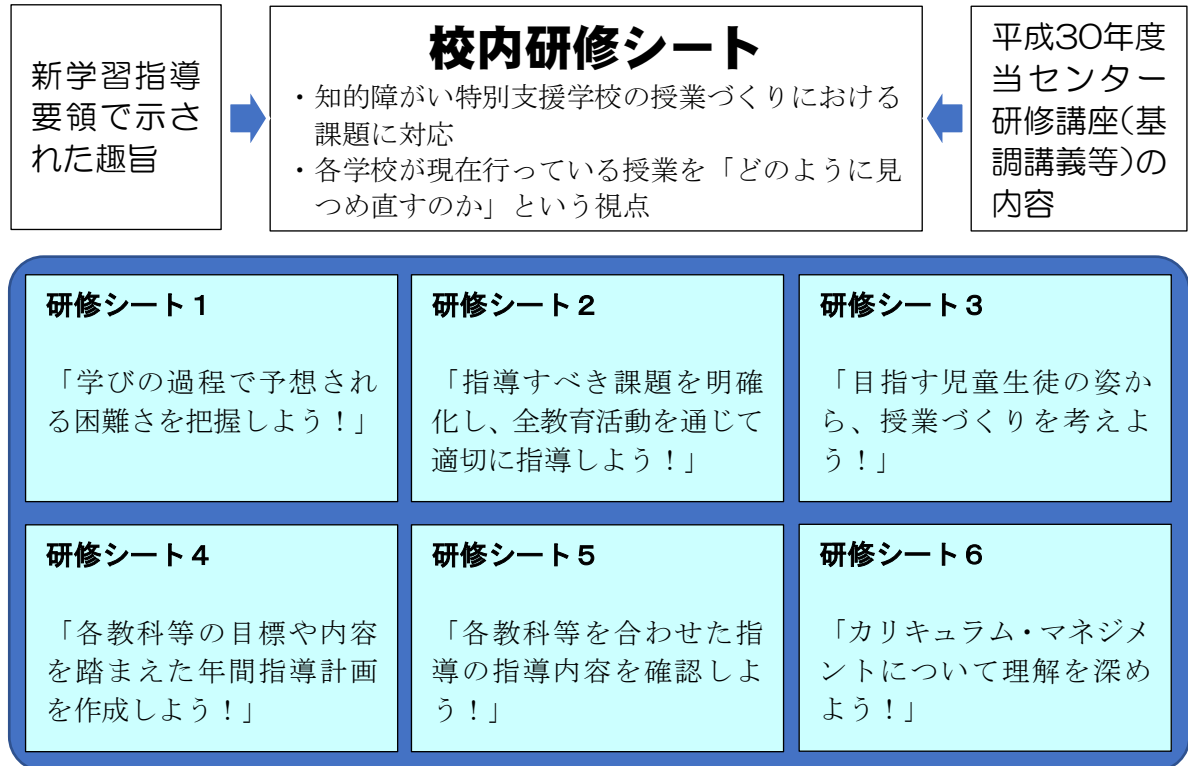
【図1】

(2) 作成の考え方

「校内研修シート」の作成に当たっては、新学習指導要領の趣旨を踏まえるとともに、平成30年度に当センターで実施した研修講座の基調講義等の内容をポイントとしてまとめている。

さらに、作成した6つの「研修シート」は、知的障がい特別支援学校の授業づくりにおける課題に対応し、各学校が現在行っている授業を「どのように見つめ直すのか」という視点を踏まえたシートとしており、資料編には、「活用の手引き」等を掲載している。

「校内研修シートの一覧は図2のとおりであり、詳細は資料編を御覧いただきたい。



【図2】

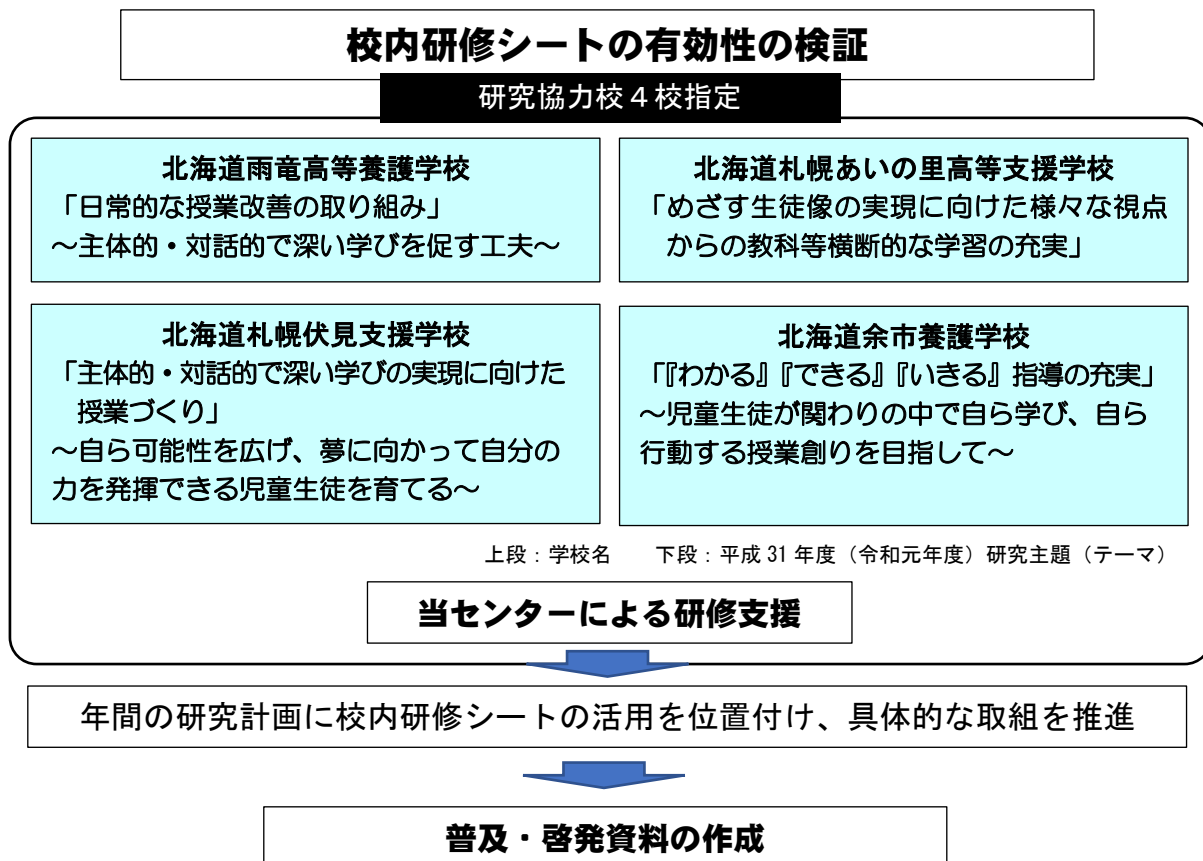
※資料編には、「活用の手引き」等を掲載

※研修シートの詳細は資料編に掲載

(3) 活用について

平成30年度に作成した「校内研修シート」の有効性を検証するため、平成31年度（令和元年度）からは、研究協力校として4校を指定し、各学校からの協力を得ながら、普及啓発の事例を作成することとした。研究協力校においては、年間の研究計画に校内研修シートの活用を位置付け、具体的な取組を推進した。

研究協力校の研究は、図3のとおりである。

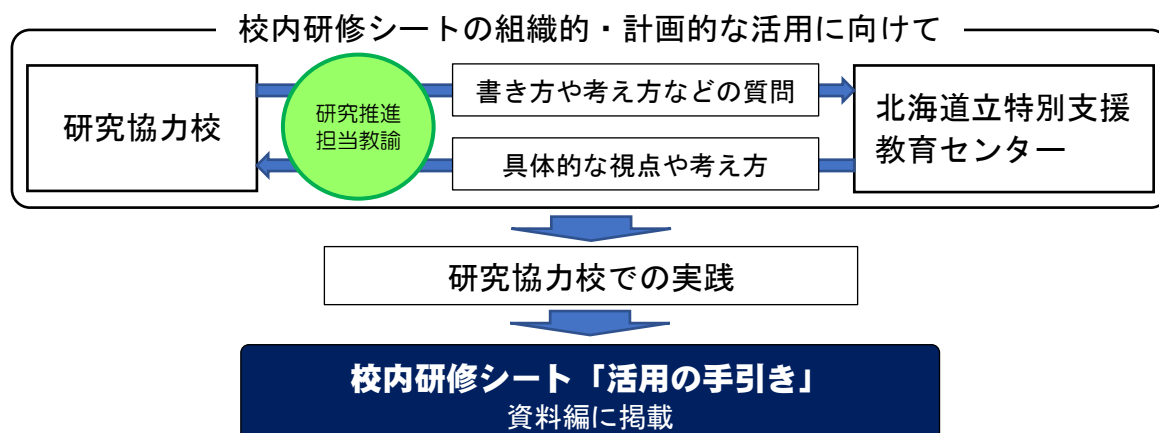


【図3】

(4) 活用に係る取組について

校内研修シートを組織的・計画的に活用するためには、書き方や考え方などについて、研究協力校からの質問や問合せ等に応じるなどして、具体的な視点や考え方を伝えることが必要である。

また、これらの内容は、研究成果の普及において、各学校の研究推進の中心となる教諭等が、校内研修シートを活用する際の参考となる内容であることから、校内研修シートの「活用の手引き」として資料編にまとめることとした。



【図4】

Ⅲ 研究協力校における取組

研究協力校と連携した研究の推進に当たっては、各学校の実態に応じた研究が組織的かつ、効果的に推進されるよう、研究に対する共通理解を図るための「連携シート」、研究推進のイメージを共有するための「デザインシート」、各段階の課題解決や効率的な研究推進のための「マネジメントシート」を活用した。

1 研究協力校における研究推進の取組

(1) 研究に対する共通理解を図るための「連携シート」の活用

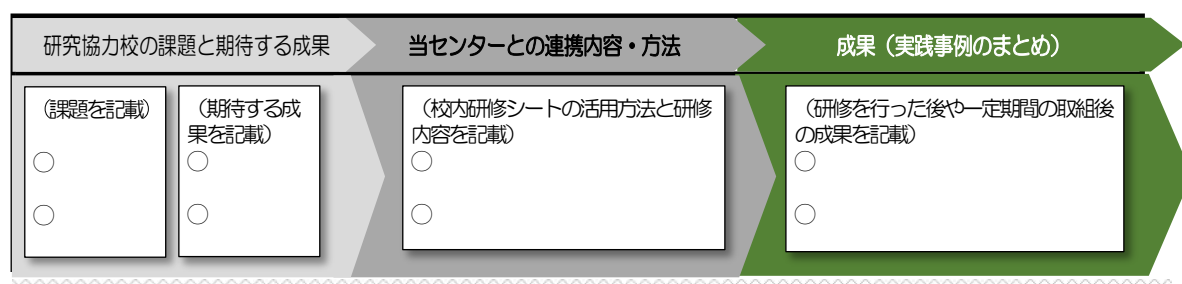
「連携シート」(図5)は、各学校の現状や課題に対応した改善策の概要を整理し、期待される研究成果の共通理解を図ることを目的としたものである。「連携シート」の活用により、各学校において校内研究の目的を達成するために、どの研修シートを活用することが効果的であるかの整理が可能となると考え作成した。

研究主題	日常的な授業改善の取り組み			研究期間	2か年研究 (2年次)
(副題)	(主体的・対話的で深い学びを促す工夫)				
視 点	現 状	課 題	改善策 (何を、いつまでに、どのように)	期待され る成果	評価方法

【図5 連携シート】

(2) 研究推進のイメージを共有するための「デザインシート」の活用

「デザインシート」(図6)は、「連携シート」で共有した課題や期待される成果を基に、各学校における研究推進のイメージや、当センターとの連携内容・方法を明確にするとともに、研究推進の流れを具体的に整理することが可能となると考え作成したものである。



【図6 デザインシート】

(3) 効率的な研究推進のための「マネジメントシート」の活用

「マネジメントシート」(図7)は、各学校の研究の推進において生じた課題や疑問、進捗状況などを当センターにおいて整理し、研究を効率的に推進することを目的として作成した。各学校における研究の実際の場面では、各研究グループから出た疑問や課題を関係者で共通理解することや、解決の方向性を整理することにより、校内研究を円滑に推進するためのツールとなることが考えられる。

日 時	○月○日	協力校との打合せ内容			今後に向けて
対応者	○○ ○○	概 要	いつまでに	協力校の状況 及び協議内容	
訪問者 及び 訪問目的					

【図7 マネジメントシート】

各学校における研究の推進においては、各シートの活用方法や活用場面などを研究計画に組み込んで取組を始めることが有効であるとする。

2 研究協力校における「校内研修シート」活用事例

事例Ⅰ 目指す生徒の姿から、授業づくりを考えた取組事例

(北海道雨竜高等養護学校 校長 石川 玉乃)

研究協力校の事例（概要）

① 研究主題

「日常的な授業改善の取り組み」～主体的・対話的で深い学びを促す工夫（2年次）～

② 研究の推進

カリキュラム・マネジメントの視点を持ちながら、多くの教師による授業実践を通してチームで授業改善を推進

③ 活用した校内研修シート

研修シート3「目指す児童生徒の姿から、授業づくりを考えよう！」

④ 成果

- ・生徒の実態を把握しようという意識をもつことができたとともに、「目指す生徒の姿」を実現するために単元計画を検討することができた。
- ・「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の3つの視点に沿った「本時の目標」や「学習内容」を考えることができた。
- ・授業だけではなく、単元計画、年間指導計画、必要な物品、学習のきまり、教科等横断的な学習など幅広く改善に向けた意見が出され、教職員全員が学校全体に目を向けて考える機会をもつことができた。

(1) 学校概要

＜学校教育目標＞

～夢・チャレンジ・実現～

「希望に向かって挑戦する明るく力強く生きる生徒を育てる」

＜教育課程の理念・特色＞

職業学科を設置する知的障がい特別支援学校高等部として作業学習を中心に、生徒が卒業後の社会生活のために、どこで生活しても汎用的に役立つ力を育成し、「キャリア教育」、「自立活動」を重視しながら、地域資源を活用した教育活動に取り組んでいる。



(2) 本校の研究及び推進体制

ア 研究の概要

＜研究主題＞

「日常的な授業改善の取り組み」～主体的・対話的で深い学びを促す工夫（2年次）～

＜研究主題設定の理由＞

前年度は授業改善に向け、「授業における困り感」から授業改善の視点を設定し、学年毎のチームで研究授業と授業者支援会議、授業改善の視点についての検討、個別授業実践を行った。授業改善の7つの視点については、継続的に取り組むことで一定の効果が得られた。

今年度は、新学習指導要領への移行に伴い、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に視点を置いた。また、北海道立特別支援教育センターの研究協力校として、「校内研修シート」を活用し、「目指す生徒の姿」から「育成を目指す資質・能力」を明らかにした授業づくりを考え、カリキュラム・マネジメントの視点を持ちながら多くの教師による授業実践を通してチームで授業改善を推進したいと考え、研究主題を設定した。

<研究の目的>

- ・チームで「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりを目指す。
- ・研究協力校としての取組や公開研究会の実施を通し、学校内外からの意見や助言を積極的に取り入れ、授業改善の充実に生かす。
- ・授業づくりを通してカリキュラム・マネジメントの視点を職員間で共有する。

<研究仮説>

目指す生徒の姿から授業づくりを考え、チームで授業改善に取り組むことにより、授業の質が向上するだろう。

イ 研究推進体制

(ア) 北海道立特別支援教育センターの研究協力校としての取組

- ① 「校内研修シート」を活用し、単元計画作成の際に「目指す生徒の姿」から「育成を目指す資質・能力」の3つの柱を明らかにした。また、明らかにした「育成を目指す資質・能力」を学習指導案の作成に生かした。
- ② 単元計画、学習指導案、授業反省を年間指導計画の改善・充実に生かすことを通じて、カリキュラム・マネジメントにつなげた。

(3) 「校内研修シート」の活用方法

本校では研修シート3「目指す児童生徒の姿から、授業づくりを考えよう!」を活用した。この研修シートの活用の意図としては、単元計画を作成する前に「目指す生徒の姿」、「育成を目指す資質・能力」を明らかにすることで、本校で活用してきたオーダーシート（学習指導案）の内容が充実し、授業改善につなげることができると考えたからである。そのため、実際の使用においては、研修シートの学習指導案の部分を省き、本校のオーダーシートを用いるとともに、単元計画の横に「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の欄を設けた。

なお、授業研究においては、前回実施した研究授業で明らかになった課題を次の研究授業で改善策を講じるよう工夫した「バトンタッチの研究授業」を実施した。

校内研修シート「目指す児童生徒の姿から、授業づくりを考えよう!」

【手順 ①】「基本情報」を記入します。

指導形態名	単元の指導時数
単元名	指導者数
生徒の実態	抽出する授業の生徒数・学年

【手順 ③】「育成を目指す資質・能力」を記入します。
 <何ができるようになるか>

<何を学ぶか> <どのように学ぶか>

【手順 ④ ⑤】単元計画をここに記入します。単元から抽出する授業1コマのポイントを裏面に記載します。

単元計画（概略）	主体的	対話的	深い
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			

【手順 ②】「目指す児童生徒の姿」を記入します。

※ 研修シートを活用した研修後は、振り返りを行いましょう。

(4) 取組の実際

ア 教科と単元名

国語「コミュニケーション（電話）」

イ 学習集団の実態（第1学年農業科2名、生産技術科3名、窯業科2名）

7名中、スマートフォンを6名の生徒が所有しているが、お店などへの連絡の経験は少ない。
前時に実施した校外学習では、一部の生徒が電話での予約を経験している。

ウ 単元構成（単元計画）～育成を目指す資質・能力の視点から～

(ア) 知識及び技能の習得

伝え合う目的や場面、相手、手段に応じた適切な表現や言葉遣いを理解する。

(イ) 思考力、判断力、表現力等の育成

他者との交流を想定しながら情報を収集、整理して伝え合う内容を検討する。

(ウ) 学びに向かう力、人間性等の涵養

電話を使って予約や問い合わせをしようとする意欲を高める。

	単元計画（概略）	主体的	対話的	深い
1	「予約の電話で伝えるべきことを知る」（7月11日6校時） (1) 電話をかけるとき、切るとき、通話のマナーについて (2) 予約の電話をする際に伝えるべきことについて意見交流 (3) 電話での連絡の利点について	○	○	
2	「予約の電話の練習をする」（7月17日6校時） (1) 生徒同士で「小グループ」を組んでの練習 (2) 想定問答集の作成 (3) 自分が自信をもって対応できる「シーン」についての交流		○	○
3	「予約の電話をする」（7月18日6校時） (1) 教師を相手にした電話練習 (2) 想定問答集で想定していない質問への対応方法 (3) 予約の電話 電話で聞くことでより早く、正確な情報得られることの理解	○		○

エ 本時の目標

- ・予約の電話をする際に相手に伝えなければならないことが分かる。
- ・実際に電話をかける疑似体験をすることで、電話で伝えることに自信を持つ。

【1回目の研究授業からバトンタッチした視点】

- ・常に話し合いのルールを視覚化する。
- ・全員を発言させる為に、発言順を決めるなど、発言回数と機会を均一にする。

オ 本時の展開

	学習内容	主・対・深	授業者のオーダー
導入	1 前時のふりかえり（予約の電話で伝えること、通話のマナー） 2 本時の予定 3 話し合いの約束を黒板に掲示する。		
展開	「想定問答集の作成」 1 プリントの説明 ①「7月20日の12時に友達と行く飲食店の予約をする」ことを説明。 ②本時の手立ての説明 個人記入→小グループ練習（各3人） →全員で確認 2 プリント記入（個人） 3 記入した内容の確認と追記（小グループ） ①模擬電話使用、店員役は帽子をかぶる ②店員役、客役を交代して行う。 ③記入していなかった内容を追記する。 4 回答の発表（全体） ①手立ての説明 ・小グループで1本マイクを使用する。 ・発言後、別の人にマイクを渡す。 ・発言に対し、拍手をする。 ②小グループ毎に発表 ③教師が発言をパソコンに入力、TV画面にうつしながら確認。 ④生徒の発表の良かった点を発表。	対6（共に考えを創り上げる） 対3（思考を表現に置き換える）	「発言の少ない生徒への配慮」 ①全体の場で自信をもって発言するために、小グループ（3人）で確認する活動を設定したが効果はあったか。 ②「発言者はマイクを持つ」という条件で全体の発表を行うことで、自分から発表できるように工夫したが効果はあったか。
まとめ	1 自信をもってできそうな回答を発表。 2 次時は教師相手の練習と実際の予約の電話をすることを確認する。		

カ 評価

- ・「予約の電話をする際に相手に伝えなければならないことが分かる。」については、相手からの質問に対して概ね正しく回答することができていた。また、疑似体験をグループで行うことにより、友人の良いアイデアを参考にしながら、自分では書けていなかった内容をプリントに追記するなど、考えを深めることができていた。
- ・「実際に電話をかける疑似体験をすることで、電話で伝えることに自信を持つ。」については、電話の玩具や店員の帽子を準備することにより、楽しい雰囲気の中で疑似体験を活発に行うことができていた。また、マイクを用いることで、これまで発言の少なかった生徒が、自らマイクを取り、発表することができていた。しかし、まとめの際に、「自信を持って答えられそうな質問があるか」を尋ねたところ、挙手した生徒が3名だけであったことから、自信がつくまでには、さらに工夫が必要であると考えられる。

(5) 取組の成果と課題

[成果]

・「育成を目指す資質・能力」を指導計画に生かす

「校内研修シート」を用いることで、「目指す生徒の姿」から、「育成を目指す資質・能力」の3つの柱ごとに「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」を具体的に考えた単元計画を作成することができた。その結果、学習内容を考える際に、より生徒の実態を把握しようという指導者の意識が高まり、「目指す生徒の姿」を実現するための授業改善が図られた。

・「主体的・対話的で深い学び」の視点を学習指導案へ生かす

「校内研修シート」を用いることで「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の3つの視点は、1単位時間の中で取り組むのではなく、単元の中で取り組むことを意識した単元計画を立てることができた。その結果、学習指導案を作成する際に、該当する視点に沿った「本時の目標」や「学習内容」を考えることができた。

・カリキュラム・マネジメントの視点を共有する

前期の研究授業の振り返りを通して、「今のカリキュラムで目指す生徒の姿は達成できるのか」について考えたり、見つめ直したりすることが大切であることが確認できた。このことを踏まえ、後期は、研究授業の反省の項目に「カリキュラム・マネジメントに関すること」を加えたことにより、授業だけではなく、単元計画、年間指導計画、必要な物品、学習のきまり、教科等横断的な学習などの視点で改善に向けた意見が幅広く出され、学校全体に目を向けて考える機会を得ることができた。

[課題]

- ・「主体的・対話的で深い学び」について日常的に取り組むためには、学習指導案の工夫・改善が必要であった。学習指導案に「主体的・対話的で深い学び」の視点をどのように取り入れることが、授業づくりを行う上で効果的なのか、引き続き、教科部会、学科部会で検討する必要がある。
- ・「育成を目指す資質・能力」を明らかにした授業改善には、単元計画の工夫・改善が必要であった。単元計画に「育成を目指す資質・能力」をどのように取り入れることが、指導計画（単元計画）を作成する上で効果的なのか、引き続き、教科部会、学科部会で検討する必要がある。
- ・授業の実施、評価、改善を通して、カリキュラム・マネジメントについて考えることができた。各授業者が考えた意見等を、今後、教科部会や学科部会で検討することにより、単元における時数の見直しや、年間指導計画の評価、改善、充実に生かすよう、学校全体で組織的・計画的に取り組む必要がある。

事例2 各教科の目標や内容等から年間指導計画を考えた取組事例

(北海道札幌あいの里高等支援学校 校長 佐々木 誉之)

研究協力校の事例（概要）

① 研究主題

「めざす生徒像の実現に向けた様々な視点からの教科等横断的な学習の充実」

② 研究の推進

各教科等で学ぶ内容を精選・整理し、実践的・体験的な学習との関連を図ることによる教科等横断的な学習の充実

③ 活用した校内研修シート

研修シート4「各教科の目標や内容を踏まえた年間指導計画を作成しよう！」

④ 成果

- ・めざす生徒像を基に、生徒が何のために学び、学んだことをどのように生かすのかを考えるなど、教職員同士の対話を通じて教科等横断的な学習について学び合う機会となった。
- ・教科や学科ごとに、育成を目指す資質・能力や学ぶ内容について整理することができた。
- ・「校内研修シート」の項目を校内研究で活用することにより、全教職員が共通理解を図りながら、校内研究を進めることができた。

(1) 学校概要

<学校教育目標>

Go for your dream

『夢のためにベストを尽くす』

<教育課程の理念・特色>

平成28年に開校した知的障がいのある生徒を対象とした特別支援学校である。本校は「普通科」と「職業学科」を設置しており、知的障がいのある生徒の学習上の特性等を踏まえ、それぞれの学科において、生徒の学ぶ内容や進路希望等に応じた教育活動を展開している。

また、地域向け販売会や、周辺施設を活用するなど、生徒の自立と社会参加を目指した教育活動を展開している。



(2) 本校の研究及び推進体制

ア 研究の概要

<研究主題>

「めざす生徒像の実現に向けた様々な視点からの教科等横断的な学習の充実」

<研究仮説>

めざす生徒像を共通理解した上で指導に向かうこと、教科等横断的な学習の視点で教育活動に取り組むことがあいの里アイデンティティを創り、教育活動のさらなる充実につながるだろう。

イ 研究推進体制

- 校内研究推進全般 研究部
- 校内研究グループの構成
 - ・教科等横断的な関連付けグループ～学習の教科等チーフによるグループ
 - ・実践的・体験的な学習グループ～教科等チーフ以外の教職員で希望グループを選択
- 関係する分掌及び組織～教務部、教育課程検討委員会

(3) 「校内研修シート」の活用方法（※図 参照）

- 「校内研修シート」の活用（夏季研修会）
 - ・北海道立特別支援教育センター所員から、教科等横断的な学習を主題とした講義により、教科等横断的な学習についての理解を深める。
 - ・夏季研修会用として作成した、「札幌あいの里高等支援学校版校内研修シート」を活用し、テーマに分かれたグループ（現場実習グループなど）による協議を行う。
- 各教科・学科シートの作成
 - ・各教科及び各学科において、学習指導要領を基に北海道立特別支援教育センターの「校内研修シート」をアレンジし、各教科・学科シートを作成する。
- グループ研究での「校内研修シート」の活用
 - ・各教科及び各学科において作成した各教科・学科シートを基に、各教科等の学ぶ内容を関連付けて、カテゴリー分けをし、テーマを設ける。
 - ・実践的・体験的な学習グループで「札幌あいの里高等支援学校版校内研修シート」（夏季研修会にて使用）を活用して、育成を目指す資質・能力や学ぶ内容を整理する。
 - ・各教科等の学びが実践的・体験的な学習の場で使うことができているのかを検証する。

【図 校内研修シートの活用】

[illegible]

※ 研修シートを活用した研修後は、振り返りを行いましょう。

(札幌あいの里高等支援学校版校内研修シート)

本校の校内研究の取組に合わせた
「校内研修シート」の活用方法の工夫

工夫したポイント①

実践的・体験的な学習においても、
育成を目指す資質・能力を明確にする
ために、「何ができるようになるか」、
「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」
の視点から検討した。

工夫したポイント②

実践的・体験的な学習では、日々の学習活動（各教科等）で身に付けた力を生かす場面として検討できるように研修シートの様式を工夫した。

工夫したポイント③

実践的・体験的な学習と他教科との
関連を可視化することにより、関連の
深い指導内容を同時期に取り扱うな
ど、単元の配列等の見直しをした。

「研修シート4」を工夫し

「札幌あいの里高等支援学校版校内研修シート」を作成して活用

(4) 取組の実際

「札幌あいの里高等支援学校版校内研修シート」を活用した取組

ア 目指す資質・能力の明確化

実践的・体験的な学習において育成を目指す資質・能力を明確にした。

【手順①】「基本情報」を記入します。

教科名	特別活動「学校祭」	年間授業時数	1学期 2学期 30 3学期
児童生徒の実態	・初めて取り組む活動 ・初めて学年全体で取り組む ・学年・団結力が協力的・学年・団結力が協力的	指導者数	29
		学年	53
		児童生徒数	

【手順③】「育成を目指す資質・能力」を記入します。

<何ができるようになるか>

- ・ステージ発表では、踊りやダンスの練習に最後まで参加する。
- ・自分の役割を理解して、積極的に取り組む。

<何を学ぶか>

- ・スケジュール管理
- ・話し合う姿勢
- ・全体(集団)の指示を理解する。

<どのように学ぶか>

- ・様々な集団(周知の少人数)で学ぶ。
- ・果敢的な場面設定(ステージ、学科別発表)

イ 関係性の整理

実践的・体験的な学習と他教科との関連を可視化し、教科等横断的な学習の視点で関連やつながりを整理した。

【手順④】各教科等の関連を図りながら、単元を配列します。

各教科名	8月	9月	10月	11月	12月
国語	読み・書き	セリフ、敬語			
社会	地図、特産物、宣伝活動、地域理解				
数学	お金、計算、時間				
理科	衛生(面、食中)				
外国語/Ge	歌、カラオケ、ダンス				
保健	アロパティック・ダンス				
体育	集団で行動、エプロン				
音楽	歌、楽器、祭(ステージ)				
作業学習	製品作り、チラシ、接客模範(おねがい)			当日の初め準備	事後学習振り返り
総合		オリエンテーション	事前学習	練習制作	事後学習振り返り
LHR		企画、アンケート			
美術	装飾、展示、ポスター、プレゼンテーション				
社会生活	マナー、身だしなみ				
家庭科	食品の取扱い、保存について				

【手順②】「目指す児童生徒の姿」を記入します。

団結力 主体性 行動力

(5) 取組の成果と課題

[成果]

・「校内研修シート」の活用（夏季研修会）

教科等横断的な学習について考える機会を設定し、「札幌あいの里高等支援学校版校内研修シート」の活用により、生徒が何のために学び、学んだことをどのように生かすのかを考えるなど、教職員同士の対話を通じて学び合う機会とすることができた。

・各教科・学科シートの作成

目指す生徒像を基に、育成を目指す資質・能力、学ぶ内容について各教科及び各学科で構成するグループで考えることなどにより、整理することができた。

・校内研究での「校内研修シート」の活用

「校内研修シート」の項目を校内研究で活用することにより、各教科・学科、グループ研究で、全教職員の共通理解を図りながら、校内研究を進めることができた。

[課題]

- ・作成した「校内研修シート」については、教務部と連携してシラバスへ反映していくなど、教育課程への反映を考えていく必要がある。
- ・学習指導要領を基に、各教科・学科シートを作成した成果を、実際の授業づくりにおいて、どのように生かしていくかを検討する必要がある。
- ・本校で育成を目指す資質・能力や各教科等で学ぶ内容を精査することにより、めざす生徒像の実現に向けた教育活動の質を一層充実させる必要がある。

事例3 複数の研修シートを活用した授業改善の取組事例

(北海道札幌伏見支援学校 校長 山下 秀樹)

研究協力校の事例（概要）

① 研究主題

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり」

～自ら可能性を広げ、夢に向かって自分の力を発揮できる児童生徒を育てる～

② 研究の推進

校内研修シートを全体研修とグループ研修で継続的に活用し、学部間で共通理解を図りながら授業改善を推進

③ 活用した校内研修シート

研修シート1「学びの過程で予想される困難さを把握しよう！」

研修シート3「目指す児童生徒の姿から、授業づくりを考えよう！」

研修シート4「各教科の目標や内容を踏まえた年間指導計画を作成しよう！」

④ 成果

- ・単元や授業の目標を「育成を目指す資質・能力」の3つの柱から見直すことができた。
- ・一人一人の学習活動を充実させることができ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげることができた。

(1) 学校概要

＜学校教育目標＞

一人一人の可能性や夢に向かって、個性を伸ばし、心豊かに、生き生きと自分の力を発揮できる児童生徒を育てる

＜教育課程の理念・特色＞

キャリア教育全体計画に基づき、育てたい5つの力（①人間関係をつくる力、②コミュニケーション力、③社会環境への適応力、④はたらく力、⑤選択・決定する力）を設定し、小学部から高等部まで一貫した教育活動を行っている。また、地域資源を活用した学習を推進し、将来に必要な生きる力の育成に努めている。



(2) 本校の研究及び推進体制

ア 研究の概要

＜研究テーマ＞

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくり

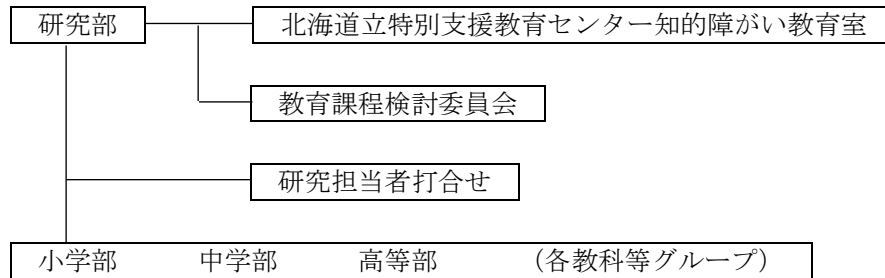
～自ら可能性を広げ、夢に向かって自分の力を発揮できる児童生徒を育てる～

＜研究仮説＞

児童生徒の育成を目指す資質・能力を具体的に捉え、「主体的・対話的で深い学び」を具現化した授業づくりを行うことで、自ら可能性を広げ、夢に向かって自分の力を発揮できる児童生徒を育てることができるであろう。

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善は、児童生徒の学びの過程を質的に高め、一人一人のキャリア発達を促すであろう。

イ 研究推進体制



(3) 「校内研修シート」の活用方法

本校では、次のとおり「校内研修シート」を活用した授業改善に取り組むこととした。

実施日 (研究形態)	内 容	実施状況
研究日① 5/20 (月) 全体研修	○研究主題、推進計画提案	・研究部から研究主題、研究推進計画の説明
研究日② 6/21 (金) 全体研修	○「校内研修シート」の活用について ・目指す児童生徒の姿から、授業づくりを考えよう。	・「校内研修シート」の活用について(演習) ・特セン所員の進行により研修シート3を活用し「育成を目指す資質・能力」について検討した。
研究日③ 7/23 (火) グループ研修	○研究対象の教科等の「育成を目指す資質・能力」を明らかにしよう ・研修シート4 「各教科の目標や内容を踏まえた年間指導計画を作成しよう」を活用する。	・研修シート4を活用して、研究対象の教科等の「育成を目指す資質・能力」を検討した。 ①学習指導要領の各教科の「目標・内容の一覧表」を活用し、学びの履歴を把握した。 ②各自対象児童生徒を選び、「育成を目指す資質・能力」を考えた。 ③交流(研究協議) ・特セン所員が小学部第5・6学年の研究協議に参加した。
夏季休業中	○研究対象の教科等の指導計画作成 ・単元(題材)計画、指導案(略案形式)	・研究日③で検討した「育成を目指す資質・能力」を踏まえた指導計画(指導案)の作成
研究日④ 8/30 (金) グループ研修	○「主体的・対話的で深い学び」の具現化に向けた授業の検討 ・指導計画(指導案)の検討 ・研修シート1 「学びの過程で予測される困難さを把握しよう」を活用する。	・研修シート1を活用して、本時(単元)の「育成を目指す資質・能力」、「学習活動及び予想される困難さ」、「手立て・支援内容・配慮事項」を検討した。 ・特セン所員が中学部の研究協議に参加した。
9月～10月	○授業の実施、評価、改善 ・PDCAサイクル ・研修シート1 「学びの過程で予測される困難さを把握しよう」を活用する。	・グループごとに研究授業の実施(2回) ・特セン所員が小学部第3学年、高等部第2学年の研究授業を参観した。
研究日⑤ 10/18 (金) 全体研修	○「主体的・対話的で深い学び」の具現化に向けた授業改善について ・これまでの授業改善を振り返る。 ・学習評価について等	・今年度の研究推進について、中間の振り返りを行った。 ・特セン所員から「校内研修シートを活用した授業改善の成果と課題について」講評いただいた。

(10月までに実施した内容を掲載)

(4) 取組の実際

ア 校内研修シート活用の実際

8月の研究日では、9月の研究授業に向けて、学びの過程で予想される困難さを把握し、手立てや支援内容の改善のため、研修シート1を活用した。

(ア) 校内研修の流れ

研究日④ 8月30日（金）
「学びの過程で予想される困難さを把握しよう」
○準備 研修シート1 指導案（略案形式） 単元計画等
1 前回の研究日の振り返り（育成を目指す資質・能力の確認等）
2 指導案（単元計画等）の説明 (1) 指導案（単元計画等）の説明 (2) 質疑
3 「目指す児童生徒の姿」を考える (1) 指導案に基づき、「目指す児童生徒の姿」を考え、研修シートに記入する ※各自1名、対象児童生徒を選んで考える（目標や学習活動等に基づき） (2) 記入後、他の先生と交流する
4 「学習活動及び予想される困難さ」について考える (1) 「学習活動及び予想される困難さ」を記入する (2) 予想される困難さに対応するために考えた「手立て・支援内容・配慮事項」を記入する ※各自1名、対象児童生徒を選んで考える
5 交流（研究協議）とまとめ (1) 予想される困難さに対応するために考えた「手立て・支援内容・配慮事項」を他の先生と交流する ※必要に応じて手立て等を協議する (2) 授業の実施日、授業の反省日、2回目の授業日について確認する
事後 (1) 研究協議から得られた「手立て・支援内容・配慮事項」について、可能なことを指導案に反映する

(5) 取組の成果と課題

[成果]

・「育成を目指す資質・能力」の理解

「育成を目指す資質・能力」について理解を深めることができたとともに、学習指導要領の各教科の「目標・内容の一覧」を活用し、単元や授業の目標を「育成を目指す資質・能力」の3つの柱から見直すことができた。また、年間指導計画の改善点についても検討することができた。

・「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業づくり

「予想される困難さ、手立て」を検討することで、一人一人の学習活動を充実させることができ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげることができた。

[課題]

- ・授業づくりでは、「年間指導計画⇒単元計画⇒本時の学習指導案」の流れの中で、「校内研修シート」を効果的に活用する必要がある。
- ・授業の評価を通して、本時の学習指導案のみの改善ではなく、年間指導計画や単元計画等の改善・充実を図るなど、各指導計画レベルで見つめ直していく必要がある。
- ・単元計画の作成では、「育成を目指す資質・能力」を3つの柱の観点からバランス良く育むことができるよう計画を立案する方策について検討する必要がある。

事例 4 指導すべき課題を明確化した取組事例

(北海道余市養護学校 校長 久富 正規)

研究協力校の事例（概要）

① 研究主題

『わかる』『できる』『いきる』指導の充実
～児童生徒が関わりの中で自ら学び、自ら行動する授業創りを目指して～

② 研究の推進

主体的・自立的に学習に参加する場面が見られる授業の展開や、身に付けた力を他の学習場面や実際の生活場面で活用することができるよう事例研究を通じた授業改善の推進

③ 活用した校内研修シート

研修シート2「指導すべき課題を明確化し、全教育活動を通じて適切に指導しよう！」

④ 成果

- ・児童生徒の課題や目標、具体的な指導場面について、共通理解が深まるとともに、「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」について整理することができた。
- ・自立活動の目標を設定する際に、課題と考えられる1つの区分だけに着目するのではなく、他の区分との関連を考えた上で目標設定をすることができた。
- ・児童生徒が目標達成に向けてどのように学ぶのか、主体的・対話的で深い学びの視点で授業改善を行うことができた。

(1) 学校概要

＜学校教育目標＞

「生きる力」「生きる喜び」を培い、豊かな自己実現の育成をめざして



この教育目標の実現に向け、本校では平成25年度より教科別の指導を中心とした教育課程の編成を行った。また、地域社会や学校の特徴を生かし、個々の教育的ニーズに基づき、実態や特性を生かした教育課程の編成・実施・評価に努めている。さらに、キャリア教育の視点を踏まえた教育目標の整理と指導内容・方法の充実にも努めている。

(2) 本校の研究及び推進体制

ア 研究の概要

＜研究主題＞

『わかる』『できる』『いきる』指導の充実
～児童生徒が関わりの中で自ら学び、自ら行動する授業創りを目指して～

＜研究主題設定の理由＞

「児童生徒にとって、環境（友達、教師、教材など）と教師の手立てには、相互作用がある」という考えのもと、主体的・自立的に学習に参加する場面が見られる授業の展開や、身に付けた力を他の学習場面や実際の生活場面で活用することができるようになることを目指し、本研究主題を設定した。

＜研究の目的＞

学習指導要領の改訂のポイントを踏まえ、児童生徒が本校で「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」の視点をもとに、育成を目指す資質・能力の明確化と、それらを育てるための教師側の手立てを明らかにすることを目的とした。

＜研究仮説＞

児童生徒が関わりの中で自ら学び、自ら行動できる授業創りを目指すことで、児童生徒にとって『わかる』『できる』『いきる』指導の充実を図ることができるだろう

(3) 研修シートの活用方法

ア 「校内研修シート」を活用した背景

本校では、研修シート2「指導すべき課題を明確化し、全教育活動を通じて適切に指導しよう！」を校内研修の際に活用して授業づくりを行った。その理由として、本校の研究は指導グループ単位の事例研究を行っており、自立活動との関連を図った指導を、全教育活動を通して行っていたことから、「校内研修シート」を活用することによって、自立活動における実態の把握や関連する指導場面を整理する必要があったためである。

イ 「校内研修シート」を活用した取組

児童生徒の指導目標や指導内容について、指導者同士の共通理解を図る中で、「校内研修シート」を使って整理するとともに、実際の指導を通して得られた児童生徒の指導内容ごとの評価・改善を行いながら、「校内研修シート」の記載内容の妥当性について見直しを行った。

小学部低学年ブロックの体育科の単元、「器械・器具を使った運動をしよう」では、「校内研修シート」を活用することにより、授業において対象児童の自立活動の指導と関連する内容や、指導場面の明確化を図った。

また、明確化することにより、学習展開では、体育科としての目標と自立活動としての目標に対する手立てを区別できるように改善するとともに、学習指導案にどのように自立活動のねらいを記述するかということについて、研究協議等や北海道立特別支援教育センター所員からの助言を踏まえ、学習指導案に自立活動の目標に関連する内容を可視化する工夫を行った。

(4) 取組の実際

ア 教科と単元名

体育科「器械・器具を使った運動遊び」

イ 学習集団の実態

本学習グループは、第1学年3名、第2学年5名、第3学年5名の計13名で構成されており、体育科、音楽科、生活科の授業では、低学年ブロックとして集団で学習している。児童の身体面の実態は、走る、跳ぶ、投げるなど、基本的な運動に取り組める児童から、歩行や階段を上り下りする際に支援が必要な児童まで、実態差が大きい。そのため、体育科では、実態に応じてより効果的に学習を行えるよう、2グループに分けて学習場面を設定している。また、教師の説明や動きに注目することが難しかったり、気になるものがあると衝動的にその場を離れてしまったりする児童もいる。そのため、学習活動の流れや整列の順番などは、イラストや顔写真で視覚的に提示し、見通しをもてるように工夫している。活動場所や活動の流れも単元を通して統一し、繰り返し学習することで、児童が落ち着いて学習活動に参加できるようになったり、自ら活動場所に移動したりする姿も見られるようになってきている。

ウ 単元構成（単元計画）

<単元設定の理由>

本単元では、器械・器具を用いて、上り下りや跳び下り、姿勢の保持や回転などの動きを楽しみながら身に付けることをねらいとした。活動の中では、順番や決まりを守る態度を身に付け、器械・器具の安全に気を付けられるように指導していく。また、学習の見通しがもてるように、スケジュールや順番の提示、約束のイラスト、目印やラインを引くなどの支援を行うこととした。

学習活動	日付	主な内容	学習集団	場所	時数
器械・器具を使った運動遊び(跳び箱・平均台)	12/2(月) 12/5(水) 12/10(火) 12/11(水) 12/12(木) 12/17(火) 12/19(木)	・学習内容を知る。 ・跳び箱を使って、跳び乗りや跳び下り、手を着いてのまたぎ乗りやまたぎ下りをする。 ・平均台や巧技台を使って、上り下りや跳び下り、渡り歩きなどをする。	小学部低学年ブロック	体育館	7
器械・器具を使った運動遊び(マット・鉄棒)	2/6(木) 2/13(木) 2/18(火) 2/20(木) 2/25(火) 2/27(木) 3/3(火) 3/5(木)	・学習内容を知る。 ・マットを使って、いろいろな方向への転がり、手で支えての体の保持や回転などをする。 ・鉄棒を使って、支持しての揺れや上がり下がり、ぶら下がりや易しい回転をする。	小学部低学年ブロック	体育館	8

エ 本時の目標

- ・跳び箱で、跳び乗りや跳び下り、手をついてのまたぎ乗りなどができる。
- ・平均台や巧技台で、教師と一緒に上り下りや渡り歩きなどができる。
- ★順番などの簡単な決まりを守ることができる。

時程	児童の学習活動	指導の手立て	指導上の配慮事項 教材・教具等
10:25	○体育館に集合し、コーンの前に並ぶ。 ○始めの挨拶をする。 ・挨拶の係の児童に合わせて挨拶をする。 ○本時の学習内容を知る。 ・ラジオ体操 ・リトミック ・グループ活動(跳び箱、平均台) ・発表 ○ラジオ体操をする。	・跳び箱や平均台は事前に準備する。 ・整列を促す。 ・挨拶をする児童を指名する。 ・挨拶をする児童に注目するよう言葉掛けをする。 ★ホワイトボードに本時の学習内容を提示する。	・跳び箱、ロイター板、マット、平均台、巧技台、整列用コーン、ホワイトボード、活動スケジュール、顔写真カード
10:30	○リトミックをする。 ・音楽を聞き、音に合わせて歩いたり、走ったり、巧技台を上り下りしたりする。	・MTに注目するよう言葉掛けをする。 ・音楽を聞くように言葉掛けをする。 ・必要な児童には、手をつなぐなどの支援をする。	・体操CD ・リトミックCD
10:35	○グループに分かれて活動する。 ※青グループ(跳び箱) ○準備運動をする。 ・うさぎ跳び、馬跳びなどをする。	★グループごとに児童を呼名し確認する。 ★学習内容や順番などをスケジュール表や顔写真カードで提示する。	・グループ表 ・活動スケジュール、手型

※指導の手立ての中の★は自立活動の指導内容と関連を図った目標に関する手立て

オ 評価

観点別学習状況の評価を実施し、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点で評価を行った。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
□ 跳び箱や平均台などを使い、運動をしようとしている。	□ 順番などの簡単な決まりを理解し、守ろうとしている。	□ 学習の流れに見通しをもち、進んで取り組もうとしている。

(5) 取組の成果と課題

〔成果〕

- ・指導グループ内で「校内研修シート」を活用することにより、児童生徒の課題や目標、具体的な指導場面について、教職員間で共通理解を図ることができた。また、具体的な指導場면을イメージすることで、「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」について整理することができた。
- ・自立活動の目標を設定する際に、課題と考えられる1つの区分だけに着目するのではなく、他の区分との関連を考えた上で目標設定をすることができた。
- ・児童生徒が思考力・判断力・表現力を働かせて課題を解決する場면을意図的に授業の中に設定するなど、目標達成に向けてどのように学ぶのか、主体的・対話的で深い学びの視点で授業改善を行うことができた。

〔課題〕

- ・教科別の指導の中で自立活動の指導を行う際、教科としての目標なのか、自立活動としての目標なのかがあいまいなところがあった。今後、授業の中で教科としてのねらいと、自立活動の指導と関連させたねらいを整理する必要がある。
- ・全教育活動において、意識的に他教科等との関連を図る必要がある。
- ・学習した内容がどのような場面で生きるのか、生活場面や将来の姿を見通して指導を行う必要がある。また、身に付けた力を意識的に他の学習場面でも活用することにより、深い学びを実現できるようにする必要がある。

Ⅳ 研究の成果

本研究では、当センターが作成した「校内研修シート」の中から、各研究協力校の実態に合った研修シートを選択し、工夫しながら活用してもらうことにより、学習指導要領改訂の趣旨を踏まえた授業改善やカリキュラム・マネジメントが各学校において促進されるよう努めた。

各研究協力校においては、新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくりの考え方等を整理するとともに、各学校の実態に応じたカリキュラム・マネジメントを推進するための基盤を作ることができたと考える。

研究の推進に当たっては、研究に対する共通理解を図るための「連携シート」、研究推進のイメージを共有するための「デザインシート」、各段階の課題解決や効率的な研究推進のための「マネジメントシート」を活用することにより、研究協力校と連携した研究を効果的に進めることができた。

これらの研究の成果を「授業づくりについて」と「カリキュラム・マネジメントの促進について」の2点で以下に整理する。

授業づくりに 1 「校内研修シート」を活用し、学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくりの
ついて 基本的な考え方について教職員の理解が深まったことにより、共通した授業改

善の視点を基に校内研究が可能になるなど、「校内研修シート」を活用した研修が有効であることが明らかになった。

2 「校内研修シート」を活用し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の在り方について検討したことにより、年間指導計画、単元計画、一単位時間の学習指導案というまとまりの中で、学習内容や指導方法について考えていくことが有効であるということが確かめられた。

3 「校内研修シート」を活用し、目指す子供像と育成を目指す資質・能力について、日常の授業とのつながりの中で検討したことにより、児童生徒が授業や単元を通して「何ができるようになるか」といった観点から目標を設定したり、学習評価に基づいた授業改善を行ったりすることが重要であることについて、教職員の理解が深まり、学校全体で教育活動の質的な向上を図るための授業評価・改善がカリキュラム・マネジメントを促進するために有効であることが明らかになった。

- 研究の推進について
- 1 各学校における研究の推進においては、目的の共通理解や推進方法の確立に時間を要することが多くあるが、本研究で開発した「校内研修シート」及び「連携シート」、「デザインシート」を活用することにより、各学校の現状や課題について整理したり、期待される研究成果について共通理解したりすることが効率的に行われるようになり、計画的・組織的な研究の推進にシートの活用が有効であることが明らかになった。
 - 2 本研究の推進においては、「校内研修シート」を複数活用することや、自校の実態に合わせて「校内研修シート」の内容を変更することにより、各校の現状に応じた活用の可能性が広がった。
 - 3 各学校における研究推進上の課題解決に向けて、「マネジメントシート」を活用することが有効であると確認できた。
各学校が独自に研究を推進する際は、「マネジメントシート」を活用することにより、研究推進担当者の経験のみに依存することなく、組織的な取組の実現を可能とするツールとなり得ることが確認できた。

V 今後の課題

- 1 「校内研修シート」の活用にあたっては、記入する内容に戸惑うことが見られたことから、記入する際に参考となる記入例を示すことが必要である。
- 2 各学校の授業研究等において「校内研修シート」を活用することにより、「主体的・対話的で深い学び」を実現するため必要な見方や考え方を、学びのプロセスとして紹介する必要がある。
- 3 授業等の教育活動の質的な向上を図るために、本研究で得られた知見を参考に、各学校が具体的な取組を推進する必要がある。

【研究協力校・研究協力者】

北海道雨竜高等養護学校・教諭	森田恵美
北海道札幌あいの里高等支援学校・教諭	鈴木奈都
北海道札幌伏見支援学校・教諭	本庄千尋
北海道余市養護学校・教諭	古屋智博

【引用文献】

- 1) 文部科学省特別支援学校幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領（平成29年4月告示）
- 2) 文部科学省特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編（幼稚部・小学部・中学部）（平成30年3月）
- 3) 文部科学省特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）（平成30年3月）
- 4) 文部科学省特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）（平成30年3月）
- 5) 文部科学省特別支援学校高等部学習指導要領（平成31年2月告示）
- 6) 文部科学省小学校学習指導要領（平成29年3月告示）
- 7) 文部科学省小学校学習指導要領解説総則編（平成29年7月）
- 8) 文部科学省中学部指導要領（平成29年3月告示）
- 9) 文部科学省中学校学習指導要領解説総則編（平成29年7月）
- 10) 文部科学省（平成28年12月21日）幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）
- 11) 文部科学省（平成28年8月26日）教育課程部会特別支援教育部会における審議の取りまとめについて（報告）

【参考文献】

- 1) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所編著（2018）育成を目指す資質・能力を踏まえた教育課程の編成．知的障害教育におけるアクティブ・ラーニングの活用．ジアース教育新社
- 2) 武富博文・松見和樹（2017）知的障害教育におけるアクティブ・ラーニング．東洋館出版社
- 3) 丹野哲也・武富博文（2018）知的障害教育におけるカリキュラム・マネジメント．東洋館出版社
- 4) 全国特別支援学校知的障害教育校長会編著（2019）知的障害特別支援学校における深い学びへのアプローチ「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業実践．東洋館出版社
- 5) 全日本特別支援教育研究連盟（2018）平成29年版特別支援学校新学習指導要領ポイント総整理．東洋館出版社
- 6) 宮崎英憲・山中ともえ（2018）平成29年版小学校新学習指導要領の展開 特別支援教育編．明治図書
- 7) 宮崎英憲・山中ともえ（2018）平成29年版中学校新学習指導要領の展開 特別支援教育編．明治図書
- 8) 宮崎英憲・横倉 久（2018）特別支援学校小学部・中学部新学習指導要領の展開．明治図書
- 9) 田村 学（2018）深い学び．東洋館出版社
- 10) 神山 努（2019）知的障害教育ならではの主体的・対話的で深い学びができる本．学研
- 11) 三浦光哉（2017）特別支援教育のアクティブ・ラーニング．ジアース教育新社
- 12) 文部科学省初等中等教育特別支援教育課編集（2017）特別支援教育春No65．東洋館出版社
- 13) 文部科学省初等中等教育特別支援教育課編集（2017）特別支援教育冬No68．東洋館出版社
- 14) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課編集（2019）特別支援教育春No73．東洋館出版社
- 15) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課編集（2019）特別支援教育夏No74．東洋館出版社
- 16) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課編集（2019）特別支援教育冬No76．東洋館出版社

抄 録

分類番号	主 題 名	「知的障がい特別支援学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進に関する実践研究 ～校内研修シートを活用した実践事例を考察して～」	
I 1－0 1			
北海道立特別支援教育センター		令和2年3月	29ページ
本研究は、知的障がい特別支援学校において、学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえた「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善や、学びの連続性を意識した教科指導の充実を図ることなど、カリキュラム・マネジメントの具体的な実践の普及・活用を促進するための方策として、「校内研修シート」を作成し、それらを活用した研究協力校4校の実践事例をまとめた。 その結果、各研究協力校においては、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善や育成を目指す資質・能力と日常の教育活動の関連を図った指導計画の作成など、学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくりの考え方を整理することができた。 また、研究の推進に当たっては、研究に対する共通理解を図るためのツールとして「連携シート」や、「デザインシート」、「マネジメントシート」を開発し、研究協力校と連携した研究を効果的に進めることができた。これらのツールは、本研究のみならず、校内研究の計画的・組織的かつ効果的な推進にも活用できるものとする。 「校内研修シート」の活用については、研究協力校の実践事例から、「校内研修シート」を用いた授業改善の取組を校内研究計画に位置付けたり、学校課題に応じてシートの内容に変更を加えて活用したりすることにより、教育活動の質の向上につながる成果が得られたことから、各学校の実態に応じたカリキュラム・マネジメントを推進するための基盤を作るツールとして有効であると考え			
キーワード	知的障がい特別支援学校 学習指導要領 主体的・対話的で深い学び カリキュラム・マネジメント 育成を目指す資質・能力 授業づくり 授業改善 校内研究 校内研修 指導内容・方法		

研究紀要 第33号

令和2年3月発行

発行者 北海道立特別支援教育センター

所長 小原直哉

〒064-0944

札幌市中央区円山西町2丁目1番1号

TEL (011) 612-6211 (代表)

FAX (011) 612-6213

URL <http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp>